

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】 遠藤 美奈

【所属】(助成決定時)

沖縄県立芸術大学大学院 芸術文化学研究科 芸術文化学専攻

【研究題目】

海を超えて往来する芸能

ー沖縄市与儀のエイサーとハワイの沖縄系盆踊りの事例からー

【研究の目的】

本研究の目的は、ハワイ日系社会において先人を弔うために開始された盆踊りが、逆輸入される形で故郷へ戻り、ムラの芸能となった沖縄市与儀のエイサーを事例として、移民がもたらす文化交錯による芸能伝播のモデルを提案することにある。

日系移民の文化慣習の多くは、移入者の出身県やムラなどに依拠しており、ハワイでは移民初期より各県の代表的な盆踊りの演目が移植され定着した。主に移民の芸能は、新しい移民や渡航してくる演奏家に支えられて維持継承してきた。一方で、故郷の芸能もまた、移民の帰郷や一時的な帰省などによってハワイで見聞した文化要素(芸能の要素)がムラなどへ持ち帰られた。これまでの沖縄芸能研究では、後者の視点は見落とされ、演奏家や移民の頻繁な往来を認めながらも、海を渡った移民が沖縄の芸能伝承へ影響を与えることなどは考慮してこなかった。そこで本研究は、移民を介し故郷へ戻ってきた与儀のエイサーが、ムラの芸能となる過程に注目しながら、ハワイの沖縄系盆踊りと与儀のエイサーとを同系統の芸能として結び付け、移民による芸能から沖縄の芸能を考察する新しい視座を提示する。

【研究の内容・方法】

本助成を受けて、沖縄市与儀のエイサーと戦前期のハワイの沖縄系盆踊りの継承に関する資料収集および聞き取り調査を行い、その結果をもとにハワイ・沖縄市与儀・沖縄本島中北部の演目や採り物などの比較分析を行った。

はじめに、与儀へ伝承される以前のハワイの沖縄系盆踊りの概要を日系新聞などから整理を試みた。一般的にハワイのエイサーに関する初出は、ある個人の日記に見られる1910年開催の手踊りによる盆踊り(採り物あり)の記事である。一方で、日系新聞の初出は同年10月の天長節の際に踊った「琉球盆踊」の記事である。さらに日系新聞からは、盆の時期に寄せられる「琉球盆踊」の批評のほか、1932年から開始された盆踊競演会での評価や、寺院での開催予告や実施内容などが確認でき、かつての「琉球盆踊」の様相をまとめることができた。なかでも、1933年と1935年に寺院で踊られた「琉球盆踊」は、実に詳細な演目の記載があり、与儀のみならず沖縄のエイサーを考察する上で極めて重要な資料となった。

次に、ハワイから持ち帰った人物の子弟や実演者らに聞き取りを行い、与儀へ定着する過程とその背景を明らかにすることを試みた。与儀のエイサーは、二人の移民によって1930年代半ばに与儀へ持ち帰られたとされているが、数年後には、第二次世界大戦によって大きな分断をむかえた。戦後になると人々は各々のムラに伝承されていた、かつてのエイサーを復元していった。与儀の場合、ハワイから持ち帰った二人がすでに与儀に不在であったにもかかわらず、ハワイから持ち帰ったエイサーをムラのエイサーとして復活させた。復活を容易にさせたのは、ハワイの「琉球盆踊」が年代を問わず参加できる手踊りであったことや、多くの与儀の人々が戦前に手踊りを習い覚えていたためであった。与儀の人々にとって、ハワイからやってきた「琉球盆踊」は、ムラで継承すべき与儀のエイサーへと意

識が入れ替わっていったのである。

最後に、これまでの調査で明らかになった戦前のハワイの沖縄系盆踊りと与儀のエイサーを、沖縄本島の中北部を中心に、継承演目や採り物などに関する比較検討を行い、沖縄芸能研究の立場から移民が行う芸能にみられる諸要素を分析した。

【結論・考察】

1900年にハワイへ到着した沖縄からの移民は、「琉球盆踊」と称したエイサーを、三線や舞踊に長けた人物を中心に発展させてきた。1910年の初出から与儀へ持ち帰られる1930年半ばまでの約25年間のなかで、1930年代はまさに「琉球盆踊」の成熟期であることが日系新聞から明らかになった。成熟期を迎えた「琉球盆踊」を持ち帰ったとはいえ、表面的にはハワイから持ち帰られた「傍流」の芸能が定着したように見える。しかし、与儀にとって「琉球盆踊」は、出自の自明な芸能として判断された。さらに、戦後沖縄で開催されたエイサーコンクールは、与儀周辺のエイサーを勇壮活発な芸能へと変容させたが、かえって与儀の人々は、自らの手踊りエイサーが周辺のムラにはない伝統的な踊りであるとの認識を示すに至った。

また、故郷沖縄から離れた環境で育まれた移民の芸能の継承内容を遡ることによって、これまで明らかにされてこなかった沖縄の戦前期のエイサーの演目、装束、採り物に関する新しい解釈の側面を提示することができた。それぞれの演目、装束、採り物の検証については、さらなる考察を必要とする。これらの詳細な検証については、助成前後の研究成果と合わせ、近日中に博士論文をまとめる予定である。